

社会関係の周縁部を捉える 散歩をきっかけとした社会関係の形成

個人を中心に他者との関係を捉えたとき、血縁に基づく家族が最も近くに、選択的な関係である友人や仲間はより遠くに位置付けられます。日本では、家族に比べ社会関係の周縁部に位置する他者に関する研究はわずかです。本稿では、2007年10月に開催された第8回アジア・オセアニア国際老年学会議（中国）でのポスター報告「Walking as a Chance to Form Personal Networks Among Seniors Living in Tokyo：東京に居住する高齢者の散歩をきっかけとした社会関係の形成」を交え、家族に比べ社会関係の周縁部に位置する他者について論じます。

高齢期の社会関係に関する 研究動向

人は、配偶者、子供、親戚、友人、学校や職場の仲間など、常に他者との関係性の中で、成長し、老いていきます。これらの他者と取り結ぶ関係を総称して、社会関係と呼びます。高齢期の社会関係は、社会老年学分野の主要な研究テーマとされてきました。日本では、欧米に比較して高い子供との同居率を反映して、主に高齢者と子供との関係に焦点が当てられてきました。1980年代以降、近隣や友人といった、社会関係の周縁部に位置する他者にも焦点が当てられるようになりました。しかし、職業からの引退などにより、これらの関係縮小が予測されるなかで、高齢者の幸福感に及ぼす影響については、十分な知見が得られていません。これは、家族に比較して選択的な関係である、周縁部に位置する他者を捉える方法が確立して

いないことによります。

周縁部も含めた社会関係を把握する試みとして、浅川ら（1999）は、社会関係を構成する2つの次元、「サポート：ちょっとした用事をしてくれた人」および「情緒的一体感：一緒にいてほっとする人」を提示しています。2つの次元それぞれについて、該当する他者について分析した結果、サポートでは平均約2.5人、同居家族が優位性を示し、情緒的一体感では平均約6.0人、友人が重要な位置を占めることを指摘しています。さらに、一緒にいてほっとする人の一部が、ちょっとした用事をしてくれた人であったことから、「情緒的一体感」は「サポート」よりも基本的な社会関係の因子であるとしています。高齢期の社会関係に関する既存研究の多くは、「サポート」のみに着目しており、ここでの「情緒的一体感」という因子の提示は、重要な意味をもつものといえます。

仲間や知り合いという 他者

先にも述べたように、研究の対象は、子供から同居家族、別居家族、近隣や友人へと、社会関係の周縁部へと展開してきました。しかし、これが、高齢期の社会関係の全てなのでしょうか？ 例えば、友人とわけて表現される仲間。出会った場面で意気投合した後に、別の場面でも関ることを通して関係を発展させるのが友人、発展しないのが仲間といわれています（『新社会老年学』p.138）。趣味のサークル活動を例とした場合、活動で定期的に会っていても、それ以外の日に一緒に外出する、お互いの家を行き来するなど、個人的に深い関りを持たないのが仲間といえます。

古谷野ら（2005）は、知り合ったきっかけとは別の関係が多い他者ほど、一緒にいてほっとするなどの情緒的一体感を感じることが多く、家族ぐるみの付き合いをしたり、サポートの提供者になることが多い傾向にあるとしています。職場、学校、趣味、社会活動などで出会った他者のうち、極々一部が、何らかの基準によって選択され、関係を重ねた結果、友人に発展していることが考えられます。

仲間、知り合い、よく見かける人などと様々に表現される、日常生活を通じて出会った他者はどんな人々なのでしょう。

散歩を通じて 言葉を交わすようになった関係

近隣での散歩は、健康維持に留意する高齢者にとって、経済的な負担が少なく、手軽に続けられる余暇活動といえます。体力・スポーツに関する世論調査（内閣府）によると、青年や中年に比較して、高齢者の散歩実施率は高いとしています。一般的に、散歩はコースや実施する時間が一定で、定期的に行われます。このことから、毎朝、同じ人にすれ違うことが考えられ、新たな関係を形成するきっかけとなりえることが考えられました。

東京都 X 区の一般高齢者 1,570 名を対象に、2006 年 9 月～10 月に、郵送配布・回収法でアンケート調査を実施しました。回収率は 35.1% で、不備のあった回答および要介護状態にあった者を除く 405 票を分析対象としました。分析対象者の 46.8% が男性で、平均年齢は 73.8 歳でした。散歩（ハイキング・近所への買い物などを除く）を通じて言葉を交わすようになった

方の有無、言葉を交わすようになったきっかけ、その方との現在の交流などについて質問しました。

①分析対象者の 71.5% が週に 1 回以上散歩を行っていました。このうち 59.5% が、散歩を通じて言葉を交わすようになった方がいると回答しました。これに、散歩する時間帯と最終学歴が有意な影響が認められました。朝の時間帯の散歩は言葉を交わす関係を形成しやすく、最終学歴が大学卒業以上では関係を形成しにくいことが示されました。

②散歩で言葉を交わすようになったきっかけを、図 1 に示した 5 つの選択肢から全て選んでもらいました。「友人の知人として知っていた」「近所の方として知っていた」「家族の知人として知っていた」は、散歩で出会う以前から知ってはいたが、言葉を交わしたことがない関係といえます。この結果、言葉を交わすようになった方がいると回答したうちの 59.3% が、散歩で出会う以前から、「近所の方として知っていた人」でした。

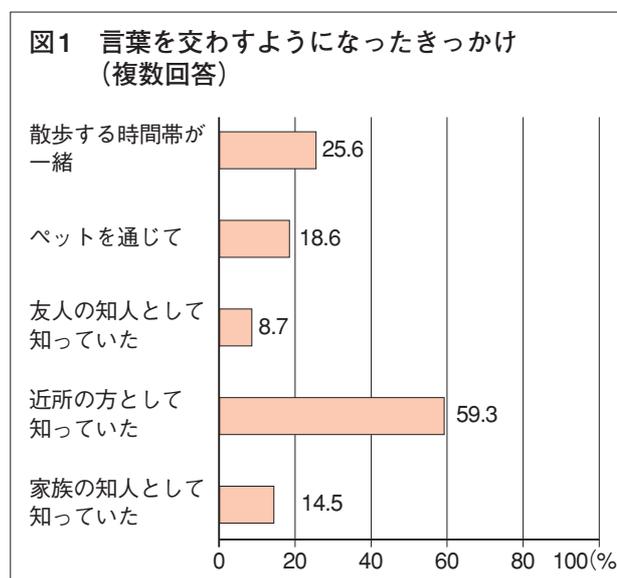
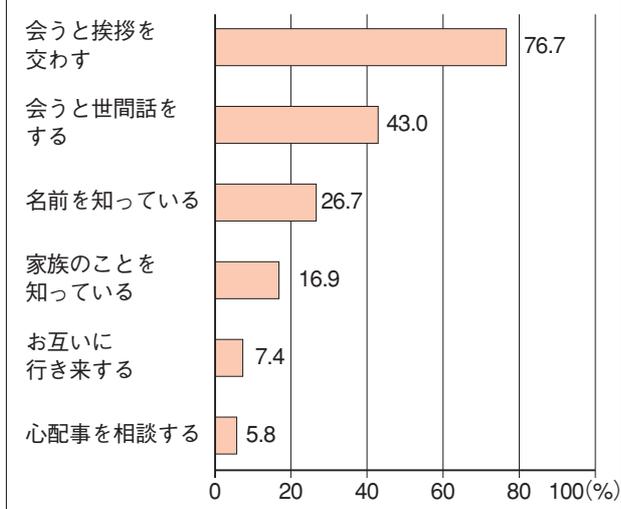


図2 言葉を交わす方との交流の様態（複数回答）



③散歩を通じて言葉を交わすようになった方との現在の交流の様態を、図2に示した6つの選択肢から全て選んでもらいました。親密さの度合いは、「会うと挨拶を交わす」から「心配事を相談する」の順に、強まるといえます。この結果、言葉を交わすようになった方がいると回答したうち76.7%が、散歩のとき以外でも会うと挨拶を交わしていました。さらに、43.0%が、会うと世間話をしていました。

④言葉を交わすようになった方がいると回答したうちの1割余りですが、散歩を通じて言葉を交わすようになった方と散歩以外で出かけていました。出かける目的は、食事やカラオケ、趣味に関する相談などでした。

これらの結果から、近隣での散歩は、新たな知り合いをもつきっかけであることがわかりました。特に、近所に住んでいることは知っていても言葉を交わす機会のなかった人と、知り合うきっかけとなっていました。

た。また、散歩をきっかけとして形成された社会関係は、心配事を相談するといった親密さはないものの、散歩以外で出会っても挨拶をする程度には発展しやすい関係であることが考えられました。

今後の展開

「散歩を通じて言葉を交わすようになった方」のような他者は、既存の調査枠組みでは把握されない関係といえます。社会関係の周縁部を考えたとき、一緒にいてほっとするような友人に比較して、仲間や知り合い程度の他者の占める割合はるかに大きいことが考えられます。これらの他者は、サークルの仲間や散歩でよく会う人など、個人として認識されていないことが多く、実情を明らかにすることは非常に困難です。

仲間や知り合いなどの周縁部に焦点を当て、2007年10月から、3名の学識経験者を迎え、定期的に研究会を開催しています。今後、アンケート調査などを通じ、より広い社会関係を捉えることを目指します。

（主任研究員 澤岡詩野）

〈引用文献〉

- ・浅川達人, 古谷野亘, 安藤孝敏ほか (1999) 高齢者の社会関係の構造と量. 老年社会科学, 21 (3), 329-337.
- ・古谷野亘, 安藤孝敏編 (2003) 新社会老年学; シニアライフのゆくえ. ワールドプランニング, 東京.
- ・古谷野亘, 西村昌記, 矢部拓也ほか (2005) 関係の重複が他者との交流に及ぼす影響; 都市男性高齢者の社会関係. 老年社会科学, 27 (1), 17-23.
- ・内閣府 (2006) 平成18年体力・スポーツに関する世論調査.
- ・<http://www8.cao.go.jp/survey/h18/h18-tairyoku/index.html>